



十六 遭遇 II

「ああ」

目の前にはホテルの自動ドアが開いたままだった。周りを見回す。ふと、気づくと近くには迎えに来た運転手兼ボディガードのロボットがいた。

「どうかしましたか」

呆然と突っ立っている美里を見て、運転手が心配になって近づいてきた。

「あいつよ。あいつに出会ったのよ。荷物を運んでいた宅急便の運転手を知らない？あいつはどこへ行ったの？」

美里は矢継ぎ早に、思いつく限りの疑問を口から放出した。だが、運転手は理解できないのか、当惑して首を傾げるばかりだ。

「少し待ってください」

運転手が眼をつぶって、そして、開けた。

「私の右目を見てください。これですか」

美里は運転手の右目を覗き込む。そこには、美里の姿が映っていた。運転手は美里の姿を映像として記録していたのだった。気を失ったかのように自動ドアの前で呆然と立ちすくんでいる美里。その横を大きな荷物を台車に乗せて運んでいる宅急便の運転手。運転手は美里の横を通りすぎると、ホテルの裏側の方に去っていく。俯いているので顔がはっきりとわからない。

「わかった。あっちね。一緒に来て」

美里はそのまま走り出す。

「待ってください」

運転手も美里の後に続いて走る。

「あった」

ホテルの裏の倉庫の前に、先ほど見た、あいつが押していた台車だけがぼつねんと放り出されていた。

「どこ、どこなの。どこに消えたの」

見回すものの、誰もいない。運転手は走り回って、辺りを探す。しかし、しばらくして美里の元に戻ってきた。

「映像に記録された運転手は見当たりません」

「逃げられたか・・・」

美里は台車を見つめる。運転手は台車に近づいて、何か証拠が残っていないかと目で映像を撮影している。

「大丈夫か」

背中から声がした。振り向く。そこには黒服が立っていた。車の音も、靴の音もしなかったのに。

「それより、あいつがいたのよ」

「知っている。だから、ここに来たのだ。そのロボット運転手の映像はみせてもらった」

黒服は大きく辺りを見回した。

「じゃあ、あいつはどこなの？」

「わからない」

黒服はさっきまであいつが押していた台車に近き、運転手と同様に、何か証拠が残っていないか、確認している。

「じゃあ、なんのためにここに来たの」

美里の口調が激しくなる。まるで、別れた夫を責めるように。そうだ。まだ、美里の頭の中には、心の中には、夫の黒い像が残っていたのだ。

「もちろん、あいつを捕まえるためだ。だが、あいつは姿形だけでなく、意識も変えることができるのだろう。あいつだと思って捕まえても、捕まえた人間はあいつではなく、もはや別人なのだ。だから、あいつは逃げられるのだ。それは、あんたも感じたことだろう」

黒服はそう言い放つと

「さあ、行こう。ここにいても、あいつは戻って来ない」と、踵を返す。

「あたしはどうすればいいの？」

美里は立ち去ろうとする黒服の背中に問い掛けた。黒服が現れたときは気配がしなかったものの、消える時は存在感を醸し出している。黒服が振り返った。その顔はにやりと笑っていた。

「とりあえず、そのボディガードと一緒に事務所に帰れ。それから作戦会議だ」

ここは鏡張りの事務所。壁には、黒服と白服、そして、美里とちひろさんのそれぞれの姿が映し出されている。実際には、本人も含めると5人しかいないにも関わらず、天井にも、床にも、姿が映っているため、一見、多くの人が集っているように見える。

もう慣れたものの、この鏡張りの部屋に入る度に、美里はうんざりとする。それは、鏡に他人が映るからではない。自分の姿が気になるのだ。自分の姿は、確かに、出掛ける時に、姿見で化粧や服装を確認する。だが、この部屋のいるように、常時、見ることはない。いや、自分が見ているのではなく、自分の分身たちに自分が見られているよう感じるのだ。この落ち着かない気持ち。だが、この不安定さ、この不安感に慣れないと、さらされないと美里たちハートケア士の仕事はできないのだ。

「これから、どうする？」

珍しく、支配人から口火を切った。

「また、一から出直しか？俺たちの作戦は知られたかもしれないぞ」

「いや。また、あいつは現れる」

黒服が何の根拠もなく断言する。

「既に、ちひろも美里も、一度、あいつの餌食になりかけたのだぞ。あいつは、これまでも、同じ人間は襲ってはいないはずだ」

「だからこそ、あいつはもう一度現れるはずだ」

「どうして？」

支配人と黒服の会話に美里が口を挟む。餌食になりかけた被害者としては、聞いておかなければならないからだ。黒服が美里の顔を見た。

「あいつも追われていることは知っているはずだ。だから、情報が欲しいはずだ」

「情報？」

美里が首を傾げる。

「あなたたち情報機関の人ならまだしも、単なるハートケア士のあたしたちに何の情報があるというの？」

美里は素朴な疑問を発した。黒服と支配人が互いに顔を見つめる。

「ひょっとしたら、美里さんが囮だってわかったかも」

今まで黙っていたちひろさんがぼそりと呟いた。美里の顔が引きつる。

「まさか。あいつの指が触ってあたしが思い出したのは、主人との別れのシーンです。あたしが囮だなんて記憶は、これっぽっちも出ませんでしたよ」

美里は全面的に否定する。だが、黒服と支配人の額に皺がより、眉毛も寄っている。

「いいえ。そうよ。だから、あいつはあなたに触れた途端、すぐに立ち去ったのよ。そして、あなたに後を追われないように、あなたをその場に留まらせようと、あなたとあなたの御主人との嫌な過去を蘇らせたのよ」

ちひろさんがまっすぐな視線で美里を見る。冗談ではない顔つきだ。

「そう言えば・・・」

美里は思い出した。あいつの指が触れた瞬間、あいつだと思った。そして、すぐに、夫との過去が思い出された。あいつは、美里があいつだ、と感じたことを知ったのだ。あいつについての知識がない者が、あいつだと思えることはない。だから、あいつは美里が何らかの情報を持っていると思っているはずだ。

だけど、美里の周りには、受付やロビーにホテルの従業員たちがいる。自分の事を知っている以上、それ以外にも仲間がいると思うはずだ。へたに近づけば、そうした仲間たちに掴まる恐れがある。それなのに、再び、美里に近づいてくるだろうか。疑問だ。

「それはありうるな」

今まで黙っていた支配人がしゃべり始めた。

「あいつは、追われていることは知っている。だからこそ、あいつはこちらが持っている情報を欲しがるはずだ。そして、それは、最も安全な方法で」

その隣で、黒服が頷いている。

「じゃあ、あたしは一体どうすればいいの？」

半分、投げ遣りな気持ちで美里は声を上げる。その顔を見つめる黒服。

「それじゃあ、もう一度だけ囮になってくれ」

「ええ！」

美里は声を荒げた。予想していた答えだったものの、再び、夫とのあの黒い過去が蘇るのかと思うと心が萎える。

「それなら、あたしが・・・」

ちひろさんが美里の横顔を見ながらゆっくりと手を上げた。

「いや、それはだめだ。お前はあまりにも内部の事を知りすぎている。万が一、俺たちの情報をあいつに知られたら、それは危険だ」

黒服は首を横に振る。

あたしならいいのか。あたしの個人的な情報で、あたしが危険な状態に陥るのはよいのか。美里は少しむくれる。だが、最終的に、美里に拒絶の権利はない。情報機関の黒服と元情報機関尾の支配人に自分の存在を知られた以上、このハートケアの仕事がなくなるだけでなく、家族にさえも危害が及ぶかもしれない。あいつと黒服たちのどちらかを選ぶかだ。そうなると、答えは既に出ている。

「やりますよ」

美里は黒服の顔を険しい目つきで睨みながら、味のしなくなったガムを捨てるように言葉を吐いた。

「ありがとう。感謝するよ」

この言葉ぐらい、感情とかけ離れたものはない。一度、ハートケア士として黒服の心を覗いてみたいものだ。だけど、どうせ、服と一緒に、心も黒く覆われていて、里美との接触を撥ねつけるだろう。だが、そんな気持ちは横に置いておいて、今だけは、その言葉を素直に受け取った。